

英語と私

田中資俊

思えば長いお付き合いである。振り返ってみると英語に相当な時間、労力を費やしていることがわかり、私の履歴書の中でかなりの部分を占めることになる。有名人ならともかく、凡人の自分史など読む人はいないと思いい、書くことを躊躇したが、今年丁度 70 才の節目になるので、振り返って記録しておくのも良いだろうと思った。

【10代】

終戦から数年、今氾濫しているカタカナ英語などほとんどない時代、中学校での英語は、発音メチャメチャの先生（無理もない、彼も終戦になってから勉強したのだから）で始まった。名ばかりの英語の先生だったが、今から思えば一つ良い教え方をしてくれた。それは教科書をページ丸ごと暗誦させることだった。今から思うととても信じられないことだが、砂地が水を吸い込むように10代前半の頭にいとも簡単に入っていった。これが以後の英語の学習に大いに役立ったと思うが、当時は効果がわからず英語に興味は感じなかった。

高校に入って最初の英語の授業、名うての雷先生ということで、皆、びびっていた。教科書、第1課に **Egyptian** という単語が出て来、この発音を席順に従って言わされた。我が同輩たちは揃って **Egyptian** と発音し先生は首を振っていた。**Egypt** だから無理もなかった。私の番で、**Egyptian** と大きな声で言った。たまたま、辞書でアクセントを調べていただけのことである。それまで怖い顔をしていた雷先生、大いに褒めてく

れた。いきなり、英語クラスの英雄になった気分を味わった。半世紀以上も経った今でも憶えている些細なことだが、これが英語と楽しく付き合えるようになった原点といえれば原点である。

今でさえ、私の中の英語の基礎は、語彙であれ、文法であれ、大学受験英語が大きく占めているようである。辞書が手垢で真っ黒になり、形が崩れてしまっていた。研究社の月刊誌「高校英語研究」にもおおいにお世話になった。

【20代】

大学では、いくつかの教科が英語の教科書だったが、英語は道具に過ぎず英語自身の勉強は皆無に近く、興味もわかなかつた。会社に入っても英語との関わりは多くはなかつた。昭和30年代、黎明期を迎えていた日本の石油化学工業に従事しており、アメリカから技術を導入して、新しい工場の建設で、夜遅くまで仕事に明け暮れた毎日だった。導入した技術用語の適切な和訳が見つからず、カタカナ英語がまかり通っていた。

【30代】

28才の時、ダウケミカルからの技術導入のため、初めて渡米しテキサスに2週間滞在した時のカルチャーショックは大きかった。生活レベル、工場の設備等に彼我の大きな差を見て、よくぞこんな国と戦争したものだと思直した。以後、ダウで何回か発表した技術レポートの原稿が、今でも会社に残っているが、発音が悪い上に、この文章では彼らにはとても通じていなかったらうと汗顔のいたりである。

38才から40才の2年間、ダウに赴任し家族共々テキサスで生活した。

今までの出張では得られない経験ができた上、それまで関心も知る必要もなかった日常の生活関連の諸々の物の名前や俗語が必需語となった。職場以外に **Hearing** の練習にと、日曜日の教会や夜間大学に出向いた。長女は小学2年に現地の小学校に入った。最初の登校日、**Sick** と **Rest Room** という言葉と **Yoko** (陽子) という名前の書き方を教えて送り出したことを憶えている。2年後、帰国する時は、この娘が親が驚く程の発音と作文をしていた(親ばか)。彼女は帰国後も、この2年間を仕事に活かしているようだ。私の方も娘ほどではないが、帰国する頃には、**Hearing, Speaking** の力がついたように思うが、今ではそのかけらも残っていない。

【40代、50代】

帰国後、数年してダウケミカルとの契約が解消し、又仕事の方も技術者というより管理的な仕事が増え、仕事で英語を使うことは殆どなくなった。これを寂しく思ったのだろうか、**Mainichi Weekly** を購読し、アルク社のヒヤリングマラソン、NHKのラジオ英会話等を細々と続けた。英検や **TOEIC** を受け始めたのもこの頃だった。岡山県倉敷市に住んでいたのも、「倉敷国際親善協会」のメンバーになり、毎月一組の外人観光客のカップルの **Home Visit** を受け入れ、英語の刺激を絶やさないようにした。

50代も半ばになると定年後のことを考えるようになり、漠然と英語を使う仕事があればと思うようになったが、具体的には何も思いつかなかった。何か情報を得ようと、日本工業英語協会に入ったのは定年の数年前だった。「定年後の生きがい」という言葉が世間で言われ出したのも、この頃だったろうか。

【60代】

この工業英語協会の大阪セミナーで、前川さんがOSTECの紹介をされ、そういう集いもあるのだと知り、入れてもらったのが60才の時である。もうこの60代の終わりに近いが、最も英語に接した10年だった。そしてこの年齢で初めて英語で報酬を得たのである(ジャーナル10号)。むろん金額的には、今まで英語に費やした時間と費用には全くペイしないが、最初に手にした翻訳料は、20代の初任給以上にうれしかった。

以来、特許を英訳することが主だが、だんだん仕事も増え、月並みな言い方だが生きがいと実益を兼ねたことをさせてもらっている。またこの10年、丁度インターネットが身近になり、ダウケミカル時代の上司、**Dr.Doumas** (ジャーナル12号)とのメール交換を頻繁にするようになり、**Native**の英語に接することができる上に、翻訳上の質問もしている。数年前に受けた工業英検1級の試験が、我が生涯での数知れない苦戦続きの試験の打ち止めとなりそうである。

今、このように振り返ってみて英語にかけた時間と労力の割には、ものになっていない。この時間を他に費やしていれば相当のことができたとも思うがあまり後悔もしていない。

さて、数ヶ月先に始まる70代はどうなるだろうか。これまで通り英語を楽しみながら、OSTECの仲間とともに勉強を続けることができればと思っている。

どうか、よろしく願いいたします。